

新しい時代を生き抜く生徒の育成

－ 生徒自らが学校と社会をつなぐカリキュラムの設計 －

Bringing of students who survive the new era

－ the design of curriculum connecting by students between school and society －

浅井 洋佑, 古賀 英一, 吉田 竹虎, 山田 雅博

Yosuke Asai, Eiichi Koga, Taketora Yoshida, Masahiro Yamada

本校では「新しい時代を生き抜く生徒」の育成を目指し、研究を進めている。研究2年次にあたる本研究では、生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせることを促したり、思考・判断・表現の見通しを立てたりすることができるような全教科共通の授業設計を行った。また、生徒に目指す姿がどれほど育まれているのかを評価する全校パフォーマンス課題の開発と、結果のフィードバックによる学びの方向付け及び教師と生徒で研究の成果や課題を共通理解することを目的とした全校研究集会を実施した。本稿では、これらを「生徒自らが学校と社会をつなぐカリキュラムの設計」とし、その成果と課題について報告する。

1 研究主題について

1. 1 「新しい時代を生き抜く生徒」について

私たちは、現在のような先行きの見えない変化の激しい時代を「新しい時代」と捉えている。そして、生徒が「新しい時代」を生き抜くためには、各教科等で育成を目指す資質・能力を身につけ、それを、他教科や学校生活、実社会・実生活（以降、他の場面）で発揮したり、生かそうとしたりすることが必要になると考えている。このような生徒を「新しい時代を生き抜く生徒」とし、その育成を目指して、本研究を進めている。

1. 2 1年次の研究課題

1年次の研究では、「新しい時代を生き抜く生徒」の姿を「附中生の目指す姿（旧）」として図1のように定め、生徒にこの姿を育むための各教科の授業設計と、育成の程度を評価するための全校パフォーマンス課題^{※1}の開発を行った（研究紀要2018¹参照）。

その結果、次の二点を1年次の研究課題とした。

- ◆**状況を把握し**、課題を見つける。
- ◆**根拠**を付け加えながら、**他の可能性**を踏まえて考える。
- ◆**要点**を絞ったり、一つに**まとめ**たりして伝える。
- ◆様々な**意見**を踏まえて、自分の考えを表現する。

図1 附中生の目指す姿（旧）

- ・ 生徒に「附中生の目指す姿」を育むために、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせることを促すことができるような、全校教科共通の方途を明らかにすること。

- ・ 学校生活や実社会・実生活に根ざした状況の下で、「附中生の目指す姿」がどの程度発揮されたのかを評価することができるような全校パフォーマンス課題を開発すること。

1. 3 教育に関わる動向から

2021年度に完全実施される学習指導要領（以降、次期学習指導要領）において、資質・能力を基盤とした教育がこれまで以上に求められるようになったことは既知のことであろう。

これに関して、奈須²⁾は、「教科等の本質を仲立ちとして、領域固有な内容と汎用的な資質・能力を結びつけ、両者の調和的で一体的な実現を目指すこと」が今後の教育に求められるとしている。そして、「この教科等の本質こそ、各教科等の特質に応じた見方・考え方である」と述べている。

また、次期学習指導要領の改訂の柱の一つである「社会に開かれた教育過程」という考え方について、同氏は次のように述べている。

教育の原理や目の前の子供の学習・発達の道筋を太くに反映させること、そして、そうやって創られた教育過程が、結果的に「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ」たものとなるように創意工夫していくことが、新学習指導要領の実践化における重要な視座になってくる

これらのことから、「生徒が、各教科等の特質に応じた見方・考え方（以降、「見方・考え方」）を働か

せ、それらを様々な問題解決に自在に駆使できるようになること」こそ、次期学習指導要領が求める資質・能力の育成につながる。そして、そのために、「教師が、社会や世界の状況を幅広く視野に入れた教育過程を創意工夫すること」は、結果的に次世代の社会をよりよいものへ導くことになると考えてよいであろう。それ故、本研究は、社会的要請に応じた研究になると考えている。

1. 4 岐阜大学教育学部附属小学校の研究から
岐阜大学教育学部附属小学校（以降、附属小学校）の研究報告第30号³⁾では、「学習した内容が、実生活の改善に結び付かない姿」を研究課題の一つとしている。

この課題について、各教科等で学んだことを他教科や学校生活で発揮する生徒の姿のさらなる具現を目指すこと。また、そこで学んだことを実社会・実生活に生かそうとする生徒の意識を高めることで、改善が期待できると考えられる。そのため、本研究を進めることは、附属小学校の課題の改善にもつながると考えている。

1. 1～1. 4を踏まえ、今年度の研究主題を次のように設定した。

＜研究主題＞
新しい時代を生き抜く生徒の育成
- 生徒自らが学校と社会をつなぐカリキュラムの設計 -

2 目指す生徒の姿

本研究における新しい時代を生き抜く生徒の育成とは、次の図2に示す「附中生の目指す姿」を生徒に育むことである。

- ◆**状況を把握**し、課題を見つける。
- ◆**根拠**を付け加えながら、
他の可能性を踏まえて考える。
- ◆**要点**を絞ったり、一つに**まとめ**たりして伝える。
- ◆様々な**意見**を踏まえて、自分の考えを
再構築する。

図2 附中生の目指す姿

様々な意見を踏まえて自分の考えを表現する際、自分の考えの再構築が行われる。2年次の研究を進めるにあたり、生徒にこの部分を意識させたいと考え、「様々な意見を踏まえて自分の考えを表現する」を、「様々な意見を踏まえて自分の考えを再構築する」と改めた。また、「附中生の目指す姿」は各教科で育みたい資質・能力と、それを発揮した具体的な生徒の姿を出し合い、本校全職員で決定したものである。そのため、全教科的に育成を図ることができる姿であると考えている。

3 研究仮説

教師が、生徒が自ら「見方・考え方」を働かせることを促すような全教科共通の方途を明らかにして授業を行ったり、生徒の学校生活や実社会・実生活に根ざした全校パフォーマンス課題の開発と結果のフィードバックによる学びの方向付けを行ったりするなど、生徒自らが学校と社会をつなぐことができるようなカリキュラムの設計をしていけば、生徒に「附中生の目指す姿」を育むことができ、その姿を他の場面で発揮できるようになるであろう。

研究2年次として、生徒が「見方・考え方」を働かせることを促すような全教科共通の方途を明らかにしたいと考えた。なぜなら、全教科共通の方途を明らかにすることで、生徒が「見方・考え方」を働かせるための共通の土台を構築することができる。その結果、生徒はこれまで以上に「見方・考え方」を働かせる経験を積んだり、そのことを認知したりする機会が増え、「附中生の目指す姿」が育まれると考えたからである。

加えて、学校生活や実社会・実生活に根ざした全校パフォーマンス課題の開発と結果のフィードバックが必要であると考えた。そうすることで、生徒が「附中生の目指す姿」を他の場面で発揮できるかどうかをより真正に評価できる。また、その結果を生徒にフィードバックすることは、生徒の学ぶことの意義や楽しさの実感につながるとともに、その後の学びの方向付けにもなる。

そして、これらが相互に関連しながら有機的に働くことで、生徒に「附中生の目指す姿」を育み、その姿を他の場面で発揮するための土壌とすることができると考えている。

4 研究内容及び本研究の構成

ここまでに述べたことを踏まえて、2年次の研究内容を次のように設定した。

<p><研究内容1> 「附中学生の目指す姿」を育むための授業設計 (1) 「見方・考え方」を働かせることを促すための視点の決定と共有 (2) 「見通し」を立てる時間を位置付けた各教科の授業設計</p>
<p><研究内容2> 「附中学生の目指す姿」を評価し、結果のフィードバック及び研究の共通理解を図るための試み (1) 「附中学生の目指す姿」の育成の程度を評価するための全校パフォーマンス課題の開発 (2) 結果のフィードバックによる学びの方向付けや研究の共通理解を図るための全校研究集会の実施</p>

5 研究内容1

「附中学生の目指す姿」を育むための授業設計

5.1 (1) 「見方・考え方」を働かせることを促すための視点の決定と共有

5.1.1 経緯

図2に示した「附中学生の目指す姿」は、各教科等で育みたい資質・能力を考慮して決定した姿である。それ故、各教科の目指す姿を育むための授業設計を行うことは、「附中学生の目指す姿」を育むことにつながる。そして、そのためには、生徒が「見方・考え方」を働かせることを促すことが重要になるのは1.3に述べた通りである。

そこで、各教科において「見方・考え方」を働かせる際の指針となるような視点を決め、生徒と共有することにした。生徒がその視点を活用することで、生徒が自ら「見方・考え方」を働かせる機会が増え、今まで以上に「見方・考え方」を働かせた学習活動が行われるようになる。また、全教科共通の方途とすることで、その機会はさらに増えるであろう。その結果、各教科の目指す姿や「附中学生の目指す姿」が育まれるだけでなく、生徒が新たな「見方・考え方」を獲得したり、ある教科の「見方・考え方」を他教科において駆使したりするようになることも期待できると考えた。

なお、下の表1は、各教科部で決め出し、生徒と共有した視点の例である。また、視点の活用方法については、教科の特質に応じて各教科部で検討し、実践することにする。

表1 各教科部における「見方・考え方」を働かせるために生徒と共有している視点の例

教科等	視点の例	教科等	視点の例
国語科	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の選び方はどうか 言葉の組み立て方はどうか 言葉の表し方はどうか 	保健体育科	<ul style="list-style-type: none"> 体を動かしている時の感覚はどのようなものか どんな状況で、どのように動けば良いか 自分（自分のチーム）の課題を解決するためにどのような練習をすれば良いか
社会科	<ul style="list-style-type: none"> 同じ（似ている）ところはどこか 違うところはどこか つなげられることは何か よりよい解決策になっているか 	技術・家庭科	<ul style="list-style-type: none"> 社会からの要求は何か 安全性はよいか 環境負荷や経済性についてはどうか よりよい生活や持続可能な社会の構築につながるか
数学科	<ul style="list-style-type: none"> より簡単にできないか 根拠ははっきりしているか 共通するところはないか 条件を変えても言えるか 	英語科	<p>コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、何を（内容面）どのように英語表現を用いて（表現面）話しているか</p>
理科	<ul style="list-style-type: none"> エネルギー領域：「どんな関係があるか」 粒子領域：「粒子で考えてみるとどうか」 生命領域：「どことどこが共通しているか」 地球領域：「違う空間ならどうか」 	特別支援	<ul style="list-style-type: none"> 他の場所でもできるかどうか 他の人とでもできるかどうか 違う場面でもできるかどうか
音楽科	<ul style="list-style-type: none"> 感じとったことの根拠はどの要素が働いているからか 願いを実現するためにはどの要素をどのように工夫するとよいか 	健康教育	<ul style="list-style-type: none"> 根拠はあるか 自分に合っているか 実践できるか
美術科	<ul style="list-style-type: none"> 違う視点で見るとどうなるか （形や色に）どんな意味や価値があるのだろうか 		

5. 1. 2 数学科の実践

実践の一例として、数学科の実践を示す。

(1) 目指す姿の関連

数学科では、数学科の目指す姿と「附中生の目指す姿」との関連を次の図3のように整理している。

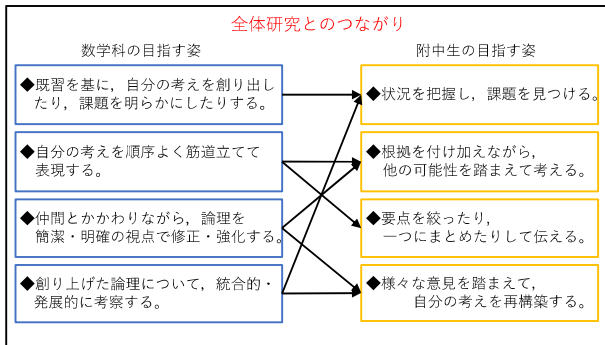


図3 数学科の目指す生徒の姿との関連

(2) 生徒と共有した視点

数学科では次期学習指導要領等をもとに、「数学的な見方・考え方」を働かせることを促すための視点を表2のように定め、生徒と共有した。

表2 数学科における「見方・考え方」を働かせる視点

視点	内容
簡潔	<ul style="list-style-type: none"> ・より簡単にできないか ・どちらが簡単か
明確	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠ははっきりしているか ・根拠は正しいか
統合的	<ul style="list-style-type: none"> ・共通するところはないか ・いつでもいえるか
発展的	<ul style="list-style-type: none"> ・条件を変えてもいえるか ・問題場面を変えてもいえるか

なお、表2の視点については、導入時や追究活動の前など、単元及び単位時間のねらいや教師の意図に応じて適宜提示するようにした。

5. 2 (2) 「見通し」を立てる時間を位置付けた各教科の授業設計

5. 2. 1 経緯

「附中生の目指す姿」は、その決定の背景から「思考力・判断力・表現力等」に関する要素が強いもの

になっている。それ故、生徒に「附中生の目指す姿」を育むためには、単元や節、単位時間において、どのように思考・判断・表現していくとよさそうかという見通し（「見通し」と表記する）を生徒が立て、その上で学習活動に臨むことが大切になると考えた。

また、OECDのEducation2030⁴⁾や次期学習指導要領解説総則編⁵⁾において、「見通し、行動、振り返り」という連続した学習過程やそれぞれの学習活動は、生徒の学習意欲の向上や学習内容の確実な定着、各教科等で目指す資質・能力の育成に資すると考えられている。このことから、各教科等の授業において、「見通し、行動、振り返り」が有意に行われるような学習過程を構築することは、生徒に各教科の目指す姿や「附中生の目指す姿」を育むのに有効であると考えられる。

そこで、「見通し」を立てる時間を位置付けた授業設計を全教科的に行うことにした。教師が「見通し」を立てる時間の位置付けを考えることで、単元や節、単位時間におけるそれぞれの学習活動の目的をより明確にした授業設計が可能になる。そのことが「見通し、行動、振り返り」が有意に行われるような学習過程を構築につながると考えた。また、生徒が「見通し」を立てることができれば、生徒はより主体的に学習活動を行うようになることも期待でき、生徒に各教科の目指す姿や「附中生の目指す姿」を育むことにつながると考えた。

5. 2. 2 美術科の実践

実践の一例として、美術科の実践を示す。

(1) 目指す姿の関連

美術科では、美術科の目指す姿と「附中生の目指す姿」との関連を次の図4のように整理している。

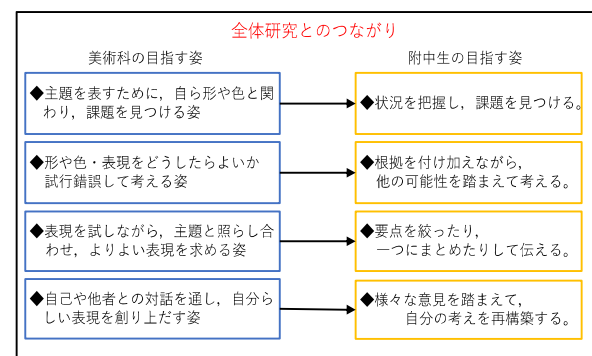


図4 美術科の目指す生徒の姿との関連

(2)「見通し」を立てる時間の位置付け

美術科では、「見通し」を立てる時間として、制作を行う前に、意図的に作家作品等の鑑賞の場を位置付けている(図5)。

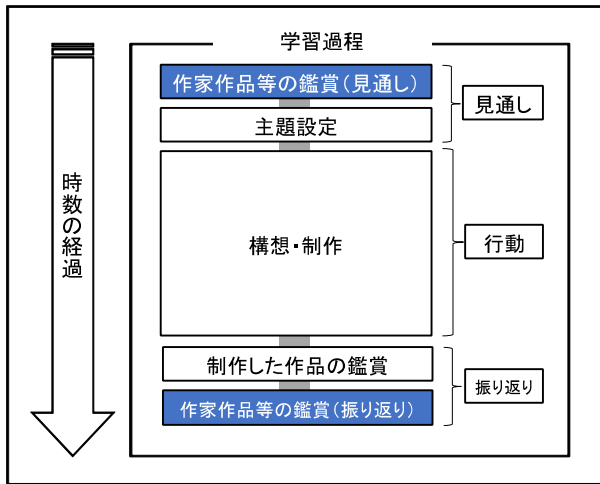


図5 題材指導の過程の例

作家作品等の鑑賞を題材の導入で位置付けることで、生徒に制作の際の「見通し」を立てさせたり、制作に対する願いをもたせたりすることができる。加えて、生徒は制作の前に「見方・考え方」を働かせる機会を得ることにもなる。また、題材指導の終末で導入と同じ作家作品等を、作者の残した言葉などと合わせて再度鑑賞する場を位置付けることで、生徒は自己の制作の過程を振り返ったり、自己の変容に気付いたりすることができる。そうすることで、生徒に美術科の目指す姿を育むことができると考えた。

なお、目指す姿の関連についての詳細や、研究内容1に関わる実践については、各教科部の研究紀要及び指導案等を参照していただきたい。

6 研究内容2

「附中生の目指す姿」を評価し、結果のフィードバック及び研究の共通理解を図るための試み

6.1 (1)「附中生の目指す姿」の育成の程度を評価するための全校パフォーマンス課題の開発

6.1.1 経緯

私たちは、「生徒が『附中生の目指す姿』を他の場面で発揮できるようになることこそ、学校と社会を

つなぐことの一つである」という立場で研究を進めている。なぜなら、「附中生の目指す姿」が他の場面で発揮されていることは、学校生活を通して育まれた資質・能力が実社会・実生活で生きて働いている状態であると考えからである。

また、全校パフォーマンス課題の主たる目的は、「『附中生の目指す姿』の育成の程度を評価すること」である。このことも踏まえると、全校パフォーマンス課題の内容は、学校生活と実社会・実生活に根ざしたものとすることが望ましい。

このことを念頭に置き、全校パフォーマンス課題の開発を行うことにした。

6.1.2 2年次の方向性

6.1.1を受け、まずは学校生活と実社会・実生活、双方に即した全校パフォーマンス課題を開発しようと思案した。しかし、結果として、全校パフォーマンス課題の内容が学校生活か実社会・実生活のどちらかに偏ってしまい、双方に即した全校パフォーマンス課題を開発することは非常に困難であることがわかった。

そこで、全校パフォーマンス課題の内容を、主として学校生活に関わるものと、主として実社会・実生活に関わるものの二つに分け、それぞれに根ざした全校パフォーマンス課題の開発を行うようにした。そして、それぞれの結果を鑑みながら分析を行い、生徒に「附中生の目指す姿」が育まれたかどうかを評価するようにした。

6.1.3 全校パフォーマンス課題の開発の要件

ここまで述べたことを踏まえ、全校パフォーマンス課題の開発の要件を、次の表3のように設定した。

表3 全校パフォーマンス課題の開発の要件

- | |
|-------------------------------|
| (ア) 生徒にとって喫緊の課題となるような内容にすること。 |
| (イ) 二者択一の内容からの脱却を図ること。 |
| (ウ) 自己の変容を確認する場を設定すること。 |

要件(ア)について、生徒にとって喫緊の課題となるような内容を扱うことで、全校パフォーマンス課題に取り組む必然が生まれ、全校パフォーマンス課題に対する抵抗感を軽減したりすることができ

ると考えた。

要件（イ）について、私たちが実社会・実生活で直面する課題は二者択一でない場合の方が多い。そのため、二者択一で判断するような内容の脱却を図るようにする。また、そうすることで、より多面的・多角的な考察が可能になることも期待できる。そのため、生徒にとって実社会・実生活に根ざした内容となるとともに、生徒が「附中生の目指す姿」を他の場面で発揮できているかどうかをより真正に評価できると考えた。

要件（ウ）について、自己の変容を確認する場を設定することで、「附中生の目指す姿」が育まれたかどうかを生徒自身が認知することが期待できる。そのことが、生徒のメタ認知を促したり、「附中生の目指す姿」を育むことに対するさらなる動機付けの場になったりすると考えた。

6. 1. 4 開発した全校パフォーマンス課題

(1) 概要

全校パフォーマンス課題の開発を進めるにあたり、まずは、主として学校生活に関わる内容の全校パフォーマンス課題の開発から着手することにした。なぜなら、学校生活に関わる内容の課題であれば、どの生徒もイメージがしやすく、初めて全校パフォーマンス課題に臨む第1学年の生徒の抵抗を緩和することができると思ったからである。

また、実社会・実生活に関わる内容の全校パフォーマンス課題を開発する際には、生徒にとって極力身

近な内容であることに加え、考えたことが今後、どこかで還元される可能性の高いものにしたと考えた。そこで、生徒の地域社会に関わる課題意識を調査するためのアンケートを実施し、その結果を鑑みて課題の内容を決定することにした。なお、表4は、開発した全校パフォーマンス課題の内容と対象、グループ編成の概要についてまとめたものである。

(2) 展開

全校パフォーマンス課題は、次の表5に示すような展開で実施した。

表5 全校パフォーマンス課題の展開

時	生徒の活動	教師の活動
第一時	a 本時のねらい等を確認し、理解する。	1 本時のねらい等を説明する。(全校放送)
	休憩及び机の隊形移動	
		2 本時の授業過程等を確認する。(各会場)
		3 課題追究の条件を確認する。
	b 個人で意見書を作成する。	4 意見書をまとめる様子を観察する。適宜タブレットを貸し出す。
	c まとめた意見文をもとに、討議を行うことを理解する。	5 討議グループを伝え、目的等を説明する。 6 討議会場への移動を指示する。
休憩及び教室移動		
第二時		7 討議内容及び条件等を確認する。
	d グループ討議を行い、意見をまとめる。	8 討議の様子を観察し、記録する。
	e 討議内容をもとに、意見書に加筆修正を行う。	9 加筆修正する際の視点を確認する。 <視点> ・自分にはない見方や根拠を書き加える。 ・根拠として曖昧であった部分を修正する。
	f 自己の変容を見つめ直し、振り返りを書く。	10 変容した箇所と理由を書くように伝える。
		11 生徒の姿の価値付けを行う。

表4 全校パフォーマンス課題の概要

実施日	条件	内容	対象	グループ編成
2018年 11月29日	学校生活	近年多くの高等学校では、生徒が学校生活で使うために一人一台のタブレット端末を持つようにしています。いくつかの中学校でも同様の考え方があります。中学校においてタブレット端末を一人一台持つことになり、考えていかなければならないことはどのようなことか、その理由も含めて考えなさい。 また、それぞれが対策チームの一員となって仲間と交流し、それを踏まえて意見をまとめなさい。	全学年 (養護学級を含む)	全グループ異学年集団
2019年 2月21日	実社会・実生活	現在、岐阜市では「次世代につながる新しい魅力が集積した場として、持続可能なまちにする」という課題があがっており、それらを解決していくために、岐阜市中心市街地活性化基本計画があります。 岐阜市の中心エリアを活性化させるために、どのようなまちづくりをしていくとよいか、「福祉」「観光」「環境」の三つの視点のうちから一つを選び、その視点に沿ってまちづくりの具体策を提案しましょう。また、そのように考えた理由などを含め、仲間と交流して意見をまとめなさい。	※養護学級では生徒の実態を踏まえ、課題の把握や討議などは、ある程度教師主導で行うようにした。	※同じ組系列の生徒でグループを編成し、学年差による生徒の抵抗を緩和できるように配慮した。

なお、いずれの実践でも、事前に課題の内容やそれに関わる資料を生徒に提示し、当日までに生徒が根拠等を調査する期間を1週間程度設けている。

(3) 評価の方法

個人の意見書の評価は、「附中生の目指す姿」に即したルーブリック^{*2}を開発し、それを用いて行った。その際、討議後の加筆修正部分についても加味して評価するようにした。

次の表6、表7は、それぞれのパフォーマンス課題に対する関するルーブリックである。

表6 主として学校生活に関わる全校パフォーマンス課題のルーブリック

レベル	意見書の記述について
5	全校P課題の内容を捉えたうえで、 他者の立場を踏まえて 、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 予想される影響(他の可能性)を含めて 、その対策についても考え、まとめている。
4	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 予想される影響(他の可能性)を含めて 、 その対策について具体的に考えて まとめている。
3	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 予想される影響(他の可能性)を含めて まとめている。
2	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 自分の結論を まとめている。
1	全校P課題の内容を捉えていない。

表7 主として実社会・実生活に関わる全校パフォーマンス課題のルーブリック

レベル	意見書の記述について
5+	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 他者の立場を踏まえながら 、 予想される影響(他の可能性)を含めて 、 具体策を考えている。また、その具体策について複数の他者の立場を踏まえてまとめている。
5	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 他者の立場を踏まえながら 、 予想される影響(他の可能性)を含めて 、 具体策を考えて まとめている。
4	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 予想される影響(他の可能性)を含めて 、 具体策を考えて まとめている。
3	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 具体策を考えて まとめている。
2	全校P課題の内容を捉えたうえで、資料や自分の経験などの根拠をもとに、 自分の結論を まとめている。
1	全校P課題の内容を捉えていない。

6. 1. 5 考察

全校パフォーマンス課題の開発に関わって、生徒の

意見書や聞き取り調査、教師の振り返り等をもとに、次のように考察した。

- ① 全校パフォーマンス課題の内容を二者択一ではないものにするには、「附中生の目指す姿」の育成の程度をより真正に評価するのに有効である。
- ② 生徒が自己の変容を確認する場を設定することは、生徒のメタ認知を促したり、「附中生の目指す姿」を育むことに対するさらなる動機付けの場になったりする。

①について、次に示す図6は、主として学校生活に関わる全校パフォーマンス課題を実施した際の生徒Aの意見書の一部である。

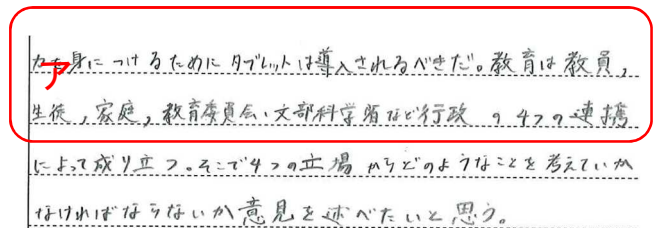


図6 生徒Aの意見書の一部

図6のアに示したように、生徒Aはタブレット端末の導入について考えるべきことを、「教員」「生徒」「家庭」「教育委員会」という四つの立場を踏まえて意見を述べており、「生徒」という現在の自分の立場だけでなく、それ以外の立場からも意見を考え、それらを踏まえて自分の考えを再構築していることが分かる。ここから、「状況を把握し、課題を見つける姿」、「様々な意見を踏まえて自分の考えを再構築する姿」が生徒Aに育まれていると評価できた。

そして、これらは、全校パフォーマンス課題の内容が二者択一でないものであったからこそ具現された姿であり、今回の全校パフォーマンス課題を通して「附中生の目指す姿」の育成の程度をより真正に評価することができたと考察した。

②について、生徒の振り返りの中に、「私は学習面のことしか考えられていなかったけれど、先輩の意見を聞いて経済面や健康面などいろんな面でメリットやデメリットについて知り、自分の意見を再構築することができました」といった、「附中生の目指す姿」を発揮できたことを生徒が認知したと考えられ

るものや、「これからこういう問題に出会ったときに、今回のように考えてみたい」といった、「附中生の目指す姿」を育むことに対するさらなる動機付けがされたと考えられるものが多数見られた。そのため、自己の変容を確認する場を設定することが、生徒のメタ認知を促したり、「附中生の目指す姿」を育むことに対するさらなる動機付けの場になったりすると考察した。

6.2 (2) 結果のフィードバックによる学びの方向付けや研究の共通理解を図るための全校研究集会の実施

6.2.1 概要

全校パフォーマンス課題における評価及び分析結果を生徒にフィードバックすることは、生徒に「附中生の目指す姿」の意義や学ぶことの楽しさを実感させたり、その後の学びの方向付けを図ったりすることにつながる。また、これまでの研究を通して、生徒に「附中生の目指す姿」を育むためには、生徒が意識的に「附中生の目指す姿」を発揮しようとするのが重要であることが分かっている。そのため、全校研究について生徒と教師間で共通理解を図り、目標設定を行う場を設けることが必要であるとする。

そこで、これらの要件を満たすための全校集会を全校研究集会と称し、年2回を目処に実施している。

6.2.2 実施計画及び展開例

研究2年次の全校研究集会は、下の表8のような計画に沿って実施することにした。

また、表9はその展開例を示したものである。

表9 全校研究集会の展開例

手順	区分	展開
1	導入	1 集会のねらいを話す。
		2 今後の社会に対する一般的な見解を話す。
		3 「附中生の目指す姿」について確認する。
2	展開前段 分析結果の フィードバック	4 実施した全校パフォーマンス課題の内容及びルーブリックについて確認する。
		5 分析結果を伝える。
		6 「グッドパフォーマンス賞」及び「ベストパフォーマンス賞」の発表、表彰を行う。
		7 「ベストパフォーマンス賞」の意見書の優れている点を話す。
3	展開後段 特に育みたい姿 の共通理解	8 特に育みたい姿のイメージをもたせるための体験活動を行う。
		9 特に育みたい姿に迫るための方法や各教科で教師が行う取組について説明する。
4	終末	10 次回の全校パフォーマンス課題について予告する。

6.2.3 展開の工夫

生徒が「附中生の目指す姿」の意義や学ぶことの楽しさを実感したり、意識的に「附中生の目指す姿」を発揮しようとしたりすることができるように、次のような工夫を行いながら、全校研究集会を進めた。

表8 全校パフォーマンス課題及び全校研究集会の実施計画

Unit	期間	区分	内容	ねらい	
1	年度当初	・全校パフォーマンス課題の評価及び分析結果のフィードバック ・研究の共通理解	全校研究集会①	全体 2,3年 1年	・本校で取り組んでいる研究の目的や意義等の共通理解を図る。 ・全校パフォーマンス課題の分析結果をもとに、「附中生の目指す姿」の具体を再確認し、その姿に迫るための内容とその手立てを共有する。 ・「附中生の目指す姿」の意義や姿の具体をイメージする。
				各教科等による「附中生の目指す姿」の育成	
2	年度中間	・「附中生の目指す姿」の育成の程度の評価及び分析 ・全校パフォーマンス課題の開発 ・全校パフォーマンス課題の評価及び分析結果のフィードバック ・特に育みたい姿の共通理解	全校パフォーマンス課題 全校研究集会②	・「Unit1」の全校パフォーマンス課題の結果から、課題の質的な改善を図る。 ・改善した全校パフォーマンス課題をもとに、評価方法の見直しを図る。 ・「附中生の目指す姿」がどの程度育まれたのか、評価・分析を行う。	
				・研究の中間として位置付け、全校パフォーマンス課題の分析結果をもとに、「附中生の目指す姿」の中でも特に育みたい姿の共通理解と手立ての共有を図る。	
		各教科等による「附中生の目指す姿」の育成			
3	年度末	・「附中生の目指す姿」の育成の程度の評価及び分析 ・年度全体の研究の考察 ・全校パフォーマンス課題の開発	全校パフォーマンス課題	・「Unit2」の全校パフォーマンス課題の結果から、課題の質的な改善を図る。 ・改善した全校パフォーマンス課題をもとに、評価方法の見直しを図る。 ・「附中生の目指す姿」がどの程度育まれたのか、評価・分析を行う。	

本稿では、各全校研究集会のねらいや、展開の具体を中心に実践内容を報告する。

工夫1 「グッドパフォーマンス賞」及び「ベストパフォーマンス賞」の表彰

生徒への評価のフィードバックとして、ループリックで最高評価を得た生徒を「グッドパフォーマンス賞」として、その中で最も説得力のある意見書を書いた生徒を「ベストパフォーマンス賞」と称して表彰する。その際は、プレゼンテーションを活用しながら、優れていると判断した理由を明確に伝え、自分の意見書と比較するようにさせる。そうすることで、「附中生の目指す姿」の意義等の実感につながると考えた。

工夫2 体験活動の実施

全校パフォーマンス課題の分析結果から明らかになった特に育みたい姿を生徒が意識的に発揮しようとするためには、その具体を生徒がイメージできていることが大切になると考える。

そこで、全校研究集会の場でその具体を体験できるような活動を実施するようにした。例えば、年度中間の全校研究集会では、「様々な意見を踏まえて自分の考えを再構築する姿」を育むために、「他者の立場で考える」ことを体験させたいと考えた。そこで、プレゼンテーションを用いながら「生徒、保護者以外の立場での意見はないだろうか」と問い、近くにいる生徒同士で簡単な討議を行うようにした。その後、生徒の姿を価値付けながら、その具体を説明した。

工夫3 各教科の授業における姿との接続

全校研究集会で示した特に育みたい姿について、各教科の授業における姿との接続を図るようにした。そうすることで、生徒は「附中生の目指す姿」の意義を理解するとともに、学ぶことの楽しさを実感したり、集会後の授業等で意識的に「附中生の目指す姿」を発揮しようとしたりするようになることが期待できると考えた。なお、集会内ですべての教科について行うことは困難であったため、不十分な教科については、集会後の最初の授業で行った。

7 結果と考察

次に示す図7は、2016年度入学生徒の3年間の全校パフォーマンス課題の結果の推移である。

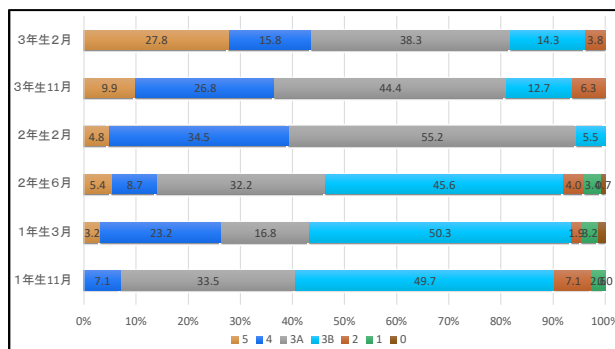


図7 2016年度入学生徒の分析結果

この分析結果等を踏まえ、本研究を通して得られた成果を次の二点とした。

成果

- ① 本研究における授業設計と、学校生活や実社会・実生活に根ざした全校パフォーマンス課題の開発、全校研究集会を通じた結果のフィードバックは、生徒に「附中生の目指す姿」を育み、その姿を他の場面で発揮できるようにするのに有効である。
- ② 今回行ったようなカリキュラムの設計は、「附中生の目指す姿」の中でも特に「様々な意見を踏まえて、自分の考えを再構築する姿」を育むことにつながる。

成果①について、図7から、第3学年の2月に実施した全校パフォーマンス課題の結果において、5の評価層の生徒が大幅に増えている。また、およそ半数程度の生徒が5や4の評価層に含まれたことに加えて、9割以上の生徒が3以上の評価層に含まれる結果となった。

このことから、本研究における研究内容1, 2が有意に働き、生徒に「附中生の目指す姿」が育まれたと考えた。また、その姿を他の場面で発揮することができる生徒も増えてきたと考察した。

成果②について、表6、表7に示したループリックの5や5+の評価基準は、「附中生の目指す姿」の中でも特に、「様々な意見を踏まえて、自分の考えを再構築する」ことを踏まえたものとして設定している。図7に示したように、その評価層の生徒が増加したことから、本研究の研究内容が「様々な意見を踏まえて、自分の考えを再構築する」姿を育むのに特に有効であったと考察した。

一方で、次の三点については、さらなる研究の余地があると考えている。

課題

- ① 「附中生の目指す姿」を育むための各教科等の授業設計の在り方を明らかにすること。
- ② 「附中生の目指す姿」を育み、それを他の場面で発揮できるようにするための小中9カ年を見通した各教科等のカリキュラムを設計していくこと。
- ③ 全校パフォーマンス課題や全校研究集会について、画一的にならないように開発・実践を進めること。

課題①について、追究活動だけでなく、「附中生の目指す姿」を育むのに有効だと考えられる導入や振り返りの在り方を明らかにすることなども含め、各教科等の授業設計の在り方を明らかにしたい。そうすることで、各教科の目指す姿のさらなる育成、教科横断的な内容を意図的に取り入れるような他の場面を意識した各教科等の授業やパフォーマンス課題の開発などが促進されると考える。

課題②について、小中9カ年を見通した各教科等のカリキュラムを設計することで、「附中生の目指す姿」の中でも特に育みたい姿を生徒の発達段階を踏まえて焦点化し、意図的に育むことができるようになることが期待できると考える。

課題③について、その時々々の環境や流行などによって、生徒の実態は日々変わっていく。それ故、生徒の実態を見極めつつ、過去の分析結果等をもとにこれまでの内容を整理しながら、画一的にならないような全校パフォーマンス課題や全校研究集会の開発・実践が必要になると考えている。その時々々の生徒の実態に適した方法を考えながら開発・実践を継続していきたい。

そして、これらの課題の改善に向けた研究を進めていくことが生徒に「附中生の目指す姿」を育むことにつながると考えている。

8 おわりに

「先行きの見えない変化の激しい時代であっても、たくましく主体的に生き抜くことができる生徒になってほしい」という願いのもと、本研究を進めてき

た。そして、これまでの教育研究の蓄積を生かしながら行ってきた2年間の研究で、各教科等で育成を目指す資質・能力を身につけ、それを、他の場面で発揮したり、生かそうとしたりすることができる生徒が徐々に育成されてきたと考えている。これは、本校の生徒と教師、そして、大学が一丸となり、「新しい時代を生き抜く生徒になる、そんな生徒を育成してみせる」という強い気概をもって研究に取り組んできた成果であると捉えている。

一方で、本校が、これまで大切にしてきた人間教育を根幹とした教育研究、そして教育目標である「独歩」「信愛」「協働」の精神は、生徒たちを取り巻く環境が刻々と変化する現代にあっても、不易なものであると考えている。

今後の研究においても、不易な部分を大切にしながらも、時代や生徒のニーズに合わせた新たな概念や方途等を柔軟に取り入れていきたい。そして「新しい時代を生き抜く生徒」を育成すべく、生徒と教師、そして大学が一丸となって研究を進めていくことを、これからも大切にしていきたい。

引用・参考文献

- 1) 岐阜大学教育学部附属中学校 2018 中間研究報告
- 2) 奈須正裕 2017 資質・能力と学びのメカニズム
- 3) 岐阜大学教育学部附属小学校 2019 研究報告第30号
- 4) OECD 2018 Education2030
<http://www.oecd.org/education/2030/>
- 5) 文部科学省 2017 中学校学習指導要領解説総則編

注釈)

※1 全校一斉に実施する教科横断的なパフォーマンス課題。全2時間の構成を基本としている。

※2 生徒の学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示したもの。

